2020年8月2日 久宝教会 平和聖日礼拝

メッセージ「あなたは平和に生きていますか」　牛田 匡 牧師

聖書　ローマの信徒への手紙　14章13－23節

長かった梅雨も明け、真夏の日差しが照り付けるようになりました。カレンダーを見ると、もう8月です。例年であれば、すでに夏休みの時期ですが、今年は子どもたちも学校に行っていますので、何だか8月らしくない8月を迎えています。更に今年の夏の風景が、例年と異なっているのは、やはり何と言ってもマスクではないかと思います。これまでは炎天下にマスクというのは考えたこともありませんでしたが、今はほとんどの人たちがマスクをして外を歩いています。初めての「マスクを着けての夏」ということで、熱中症なども心配されますが、家を出る時にマスクを忘れると、周りの人の視線が気になったり、何だか居心地の悪さを感じたりしてしまうこの頃です。

ニュースを聞いていると、全国で新型コロナウイルスに感染した人の数が、日に日に増え続けています。既に緊急事態宣言をしていた4月や5月よりも感染した人の数は増えていますが、国は人々の社会生活や経済活動を止めることはせずに、感染予防と経済活動の両立を図るという方針のようですし、多くの人も「もう春のようなステイホーム、閉じこもり、営業自粛はしたくない」と感じているのではないかと思います。

国も自治体も「新しい生活様式」を提唱し、「お店を選ぶ時には、感染予防を徹底していて自治体公認のステッカーの貼ってあるお店に行ってください」と言って、ステッカーの配付を頑張っているようです。「マスクをしていますか／していませんか」「ステッカーを貼っていますか／貼っていませんか」「熱があったら、PCR検査をして、陽性でしたか／陰性でしたか」……。日に日に感染者数は増え続けていますから、いつ自分たちも感染するか分からないという不安が、常にあるとはいえ、社会全体がすっかり「人々を区別する空気」でいっぱいになっているかのように感じています。

教会の礼拝も例外ではありません。緊急事態宣言が出されていた4月5月もそうでしたが、「人々が共に集って礼拝する」ということを大切に守って来た教会が、それを止めてよいのか……。「教会に行った方が良いのか、行かない方が良いのか」「命が大事なのか、命よりも大事なものがあるのか」など、様々な人の様々な意見がありました。答えが明確ではない問題にぶつかった時、スポーツのようにある一定の所に境界線を引き、「ここまでがセーフで、ここからはアウ

ト」とルールを定め、「私たちはセーフで、あなたたちはアウト」と言って安心したくなるクセが、私たちにはあるように思います。しかし、現実はそんなに単純明快なものなのでしょうか。神様はどこにおられ、どのような礼拝を喜ばれているのでしょうか。

そのような問題は、イエス様が歩まれた 2000 年前にもありました。今日の聖書は、宗教的な善し悪し、清さとケガレに関するもので、パウロがローマの教会へ書き送った手紙の中の一部でした。ユダヤ教の律法には、食べて良いものと、食べてはいけないものが細かく定められていました。律法で清いとされているものは食べても良いが、汚れているとされているものは、食べてはいけませんでした。そしてその食物規定を守ることができる人は義しい人と見なされ、守ることができない人は罪人だとみなされていました。しかし、そのような規定を守ることができるかできないかは、本人の心がけ次第というだけではなく、その人が置かれている社会的身分や職業、経済状況などの様々な要因も関係していました。そのような中で、イエス様が言われたのは、「外から人に入って、人を汚すことのできるものは何もなく、人から出て来るものが人を汚すのである」(マルコ 7：15)、つまり「何を食べるか否かで、人が汚れたりするわけじゃない。そんなこと気にしなくていい」ということでした。パウロが 14 節で「私は、主イエスにあって知り、確信しています。それ自体で汚れたものは何一つありません。汚れていると思う人にとってだけ、それは汚れたものになるのです」と言っているのは、そのことです。言い換えるならば、「私は、主イエスがそのように言っているのを知っています。それ自体で汚れているものはありません。『それが汚れている』と思う人にとってだけ、それは汚れたものになるのです」ということです。

しかし、人々の習慣や社会的な文化というものは、そう簡単には変わらずに、根深く残っていたところもありました。イエス様に従って行くと言った最初期のキリスト教共同体の中にも、やはり食べ物について、「それはいい、あれはダメだ」という人々が何人も、それも各地にいたようです。そのためにパウロはこの手紙を書き送っています。15 節「食べ物のために、きょうだいが心を痛めているなら、あなたはもはや愛に従って歩んではいません。食べ物のことで、きょうだいを滅ぼしてはなりません。（中略）ですから、あなたがたにとって善いことが、そしりの種にならないようにしなさい」。何故なら、17 節ですが、神の国とは「何を飲んだり食べたりして、良いか悪いか」という所にはあるわけではありません。神の国とは聖霊と共にあって実現する正義と平和と喜びのある所にあるものだからです。

ここでパウロが「全てのものが清いのだから、何を食べても、何を食べなくて

も、そんなことは一切関係ありません」と言い切っていれば、それで良かったのですが、そうはせずに、彼は回りくどくあまりハッキリしない形で、文章を書き綴っています。それは、断言するだけでは、当時の教会の人々には伝わらないと考えた末の配慮ということもあったでしょうし、またパウロ自身がかつて、それら律法に定められた食物規定を厳格に守って来ていたという自身の背景に由来するものだったのではないかと考えられます。

20 節以降も何だか、ハッキリしないような表現が続きます。「食べ物のために、神の業を無にしてはなりません。すべての物は清いのです。しかし、つまずきを自覚しながら食べる者にとっては、悪いのです」……。良いのか、悪いのか、「一体どっちなんだ」と言いたくもなりますが、「これは汚れているかな、大丈夫かなと、心配しながら食べたら、それは汚れになっちゃうよ」ということなのでしょう。22 節の「自分で良いと認めたことについて、自分を責めないなら幸いです」という言葉も、つまり「自分で疑いを差しはさまないでいられるなら、そこには神様からの力、助けがありますね」ということなのだと思います。

23 節には「罪」と言う言葉が出て来ますが、元の言葉の意味からすると、神様の思いから外れている、神様に向かっていない、「道を外れている」と理解すると分かりやすいかと思います。大切なことは、「これは大丈夫かな」とビクビクして、疑ってしまう自分を脇に置いておいて、「何を食べても大丈夫」という神様からの力を受けて歩むこと、そして周りの人たちともお互いに裁き合わないことなのだと思います。「神の国」は食物規定という境界線に守られた安全圏の中にあるのではなく、聖霊と共にあって実現する正義と平和と喜びのある所にこそ、あるものです。

では何故、私たちはすぐに、人との間に境界線を引いて、「自分たちは正しい」「こちら側は安全」と言いたくなるのでしょうか。そこには区別や差別があるだけで、平和がないにも拘わらず、すぐに裁き合ってしまうのは何故なのでしょうか。それは「原罪」とも言うべき、人間の業、性の故かもしれませんし、また別の言い方をすれば、現代を生きている私たちもまた、過去から連綿と続いている暴力の犠牲者である故かもしれません。しかも、その暴力の規模は時代を経るに従って拡大し続けて来ています。75 年前のヒロシマ・ナガサキから、核兵器の廃絶を訴え続けて来ているにも拘わらず、今もなお、この地球を何度も破壊し尽くすだけの核兵器が世界中に存在しています。「人間が制御できるはずだ」と言っていた原子力発電所は、制御不能となり今もなお暴走中で、その実態すら把握できていません。そこに今回の新型コロナウイルス感染症がやって来ました。

もはや「ここは安全」という場所はありません。今までに人間が勝手に引いて来た様々な境界線が、意味をなさなくなったとも言えるかと思います。とは言え、多くの人がこの新しい病気に苦しみ、不安を抱えておられます。特に貧困など社会的な困難を抱えておられる方々には、より一層の試練となっています。そのような時代の中で、私たちはどのように生きることができるのでしょうか。絶望だけに終わるのではなく、どこを目指して行くことができるのでしょうか。

今回のコロナ禍の状況の中、「お家にいよう・ステイホーム」という言葉が提唱されましたが、同時にインターネットを使って寄付金を集める「クラウド・ファンディング」というものも注目を集めました。特に私が気にしていたのは、北九州でホームレス支援活動を続けて来られている奥田知志さんら NPO 法人「抱樸（ほうぼく）」が行っていた活動「コロナ禍で仕事と住まいを失った人に住宅を提供する資金を」でした。それは全国に増えて続けている空き家と、ホームレスの方々への支援とを組み合わせるというプロジェクトで、5 月からの 3 ヵ月間で目標 1 億円の寄付金を集めるという大規模なものでした。一人 10 万円の特別定額給付金と相まって、多くの賛同者が寄付してくれたと聞いていましたが、6 月末の時点で集まっていたのは、目標額の約半分でした。私もさすがに 1 億円は難しいかなと思っていましたが、奥田さん自身も 1 億円は難しいだろうと思っていたそうです。しかし、7 月末には目標の金額を越えて、結果的に 1 万人余りの支援者から 1 億 1500 万円もの寄付が集まったとのことでした。新聞記事によると、その他にもコロナの医療支援など 1 億円を超える大口のプロジェクトが、このコロナ禍の状況下でいくつも生まれたそうです（朝日新聞デジタル 2020/8/1「何の見返りないのに、1 億円超『在宅でお役に、望外』」）。

命が脅かされている時代だからこそ、命を守る取り組みへと多くの賛同者が集まる……。暗闇の中に光が輝くように（ヨハネ 1：5）、この時代も決して絶望だけに終わってはいません。命を創られた神様は、その全ての命を取り去ることはないと、大洪水の後に虹を立ててノアと契約されました（創世記 9）。私たちは今も、その神様の計画の中に生かされています。「平和」はある特定の境界線の中、区切られた聖域、清さの中にあるわけではありません。神様（聖霊）と共に歩むその働きの中に、正義と喜びと共に実現されるものです。

「あなたは平和に生きていますか」……。この問いに対しては、私自身は残念ながらいつでも「はい」と答えられるわけではありません。また社会的、時代的にも、今の社会は決して平和ではありません。しかし、そのような現実にあっても、平和を求めて、足元から平和をつくる人へと変えられて行きますようにと、願っています。